二季彼岸

863
106

国立国会図書館　タイトル『二季彼岸』 請求記号 863-106

ガラス使用

863-106

二季彼岸序

一年始有一年春百歳第二百業人也
之れむるこゝろ〳〵こゝ丁知きたる況旨い
蓮二ゝ師十七回忌きたるあれいふ回忌の
案内を忘れ遠国を営むるとたゆ書物載
雲和尚生松巷の月又んと古子の秋中四を
しと世法令和一向ゝ先やゝ古わてこゝ志
感しゝ仏府よりゝと駐め例乃為生菴ゝ

一枕亭 麥刻 改曲時

みを義河の[illegible]に[illegible]を[illegible]
なひさ日く来り[illegible]
遠あ[illegible]
人を座を[illegible]と[illegible]
容易に入門の事を[illegible]
寥一篇賞を[illegible]
り[illegible]
西楽寺小西書三度[illegible]

門人を列百餘家名すれど香奠を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちりとなるべき不相ふ法人ありとなるよ孰きん
是平の弥陀所や是不思やとふるる
命しるべ山を書しむかる毎ねしるべ
憶斎の弥陀を書のこるや柳宗師を
乃むり黄山ふ法と晩しハ月院を
亡名乃ちとなるべき梅花佛乃三字を
禮塔ふ移し所二中年北星和を迎
享保辛亥二月七日を稱ふ迎化をする

実ふ梅花佛乃法師なるや是をれ彼岸の
二季ふ乃ち教不可思儀の因縁かくのごとし
仏を宗門の称り謝ぶるべん師をそなる
侍く弱ふてを宗師乃徳光なるを表くも
其流を汲く小子等ハ今日修法ふ示しむ
仏恵ハ是ふ乃ん仏の恵ハ是ふ法ハ
人を乃敬誠ふ心ふ心ふ世師光ふ
照ふれ彼岸を出ふ正乃を仏人教をい

世世の形く世界を踏濁
界九地をとゝ〜祈る名あるを高塚堂乃
花を折く二季彼岸の本向菩提塚の
石日をつゝ南無妙法蓮華経回向洋徒永世
海くふ聲ゆゝ尊き事と

延享丁卯仲春七焉　仙臺城北菊洞　芳水達書

悔咎佛十七回忌

二季彼岸

雲裡撰

春秋花月

二季彼岸

奥仙堂連中一巡

東京帝国大学図書館

春一　白英

咲そめてひろん園をやむあけぼ　雲裡
ゝ乃日を灯を梅もちらるゝ　葉汁
はゝ子ゝ其雪信ゝ高ゝたれを梅　黛里
祖父ゝ智重ゝ古誰もおよぬ　青山
神汐ゝ帆ゝ魚あゝ花ゝゝ月　蛙夕
明れいかゝい春もあゝゝ

元二　星童

学び人に行きて月を見る郎　雲程
はかなくも掻き掃ひ捨てぬ　百瓦
姑乃角を月の世界に打ちうつ　以中
きのふ乃月を数へ数へ　素里
むさし野の月は旅寝のあちこち　如康
新酒いちめんに如るとき世界　

元三　素西

海とつれなく日を暮らす柳うち
うれ世乃表をはらはら紫れ戸　雲程
茅屋よりやまを河乃宮も見て　琴湖
宮んとかんうる鼻乃うちよ　呂邦
海風と指よりはしてそれ月　泉江
都うとをうらの咲くと咲く人　尤梁

三月

住とてや泥の世ふまれぬる　雲程

九万八千の新乃まつ風　林多

なり沉月を西方の塔よりぬる　鷹考

ゆくすゑ男のちとふ人なうり　泥碧

映物ハ沈る月をこゆれと遠を訪　硯笑

さらひの月を沈ぬ

三月　千蔭

山くゝ破ゆく月をたち猶ぬる　雲程

蛙も鳴ゆくを夜重圃　壺邦

さ所乃月をうぶ稀の袖長う　東籍

秋をたきたもとり物こ　雑山

結きりて二十三夜をいとり獨　岨栗

月乃月乃風もふ秋乃風

二十六い　　芦百

山高き川の流れや紅葉の色
　紫の暮い元て秋月　　雲祀
本紙は源氏の懐乃まを咲て　　丈芝
　泥舟鞋ともあるか様な　　烏明
竹馬を風よきそれくも暗海れ　　杏下
　まさの忠義を犬乃忠吼　　杜薩

二十七　　可耕

秋乃稲のまする下や稲乃花
　つゝ菜よ京北神の雪も噴く　　雲理
世界ふい新世も汗うく時ふ水て　　文錦
　高乃ちゝかいまれ乃屋　　梶司
公園い月乃ちあて見ちかも　　御川
　一聖ふして世ゝ年の姉　　楊雨

元八　　紀才

糸竹や雪の琴
吉野うつす雲の探手　雲裡
孤雪乃山ゑ出れ月照て　春竜
風呂の底りに行ける　梅左
ようくと嬉いさ門出　如啓
鄙ゑ行ばとりかなし　河我

元九　　千之

日和よ咲ぬ梅乃花
雪とのくる時乃雲　雲和
ちとせとて緑も久しき　星頃
あけくれ池乃殺生禁乃　水巴
ぬるれも沈よ今それ鏡の月　五蜀
夏よ涼うなる市　茶芽

冬中　　東雲

[illegible]　雲枕
[illegible]　青雨
[illegible]　拾祀
十三夜の月の蹴のはてもなし　白萩
[illegible]　惜雪

秋一　　左門

葉乃音も少しむなしき秋の山　雲程
[illegible]　李冠
[illegible]　支水
京のたよりいかに無もあれ
[illegible]　南星
[illegible]　妙舟

国立国会図書館　タイトル『二季彼岸』　請求記号 863-106　ガラス使用

二十三

麦山

晴乃ちの初雪を芋もちの秋
出張りの月は高き釜突　雲裡
新たなる新代官の来たりて　琴柱
屏風の謎をうけて遊中　白吉
素手に豆もぎ枝を切りて　舟中
何の変もいたてきれいなる　左静

二十三

吉水

新皇や三つ巴の新星ひら
月いたりに徒くとおいて　雲裡
やゝ入の伊達を嫌りの月を　拾琶
藝の晴れも本を乃千者　菓史
お後もたうの月見の年史　陽凡
せく行とありつゝ恋の焼　似扇

文愛

宮よりたてまつり給へる声

りみちの橋も高くなるよ　通天　雲程

ちゝはゝ六日七日の月も出て　左門

たまりつゝあぬ男立ちも　弁亟

三段よりの風呂に漕まハり　文紫

りゝの立さまも雪形なるよ　紫雨

和隣

高嶺おろしやうちかゝる萩の色

折も嬬入れば紅の乱れ　雲程

隅田川をうつゝ月もうつる　千賀

碎たるれる玉を移す　杉茂

ちゝはゝの越し嘆ハ入り　笠也

こゝろ乱れの朝も来て　光谷

元六　一面

疎出する鶯遠ひて梅ちる
月を待つすりの人　泉雲　雲程
龍高き雲い梅をうけされて　何邑
ゆをえつけるかりて春屋　梅史
嫁ゝ夏世ひかりて喧嘩　芳角
こゝ後の所をの雲ふ雲よ　為安

元七　漁舟

拓くもとにみて屋敷
山乃けれも小高きの雪　雲程
梅現のかるふ月をのうて　泉文
江口の里よ見えいとあるや　梅年
ゆるひも面こ彩あるより　文芦
数こゝしもと好新大西　白李

題八　拾和

山茶やその八重垣も一ちらす
ちりくて月もつれなし　雲程
松風の響もけさうれ物さび　東旦
いなくくるのきこゆ雁　東珠
出めのなくこゑ月慣をたゝ暮　松韶
ムリ人ちるれさうゝ鳴　英枝

題九　文理

雪乃朝よ色やなくゝ冬ゝ
霜ゝも新を見きれ有明　雲程
乃連ゝ雲又入同士結結糸　雨布
月出さい乎乃人とゝ新　玉似
上座ゝ陰く飯も冨士の山　芦人
きゝ居ゝてもとけ孫例　松西

元年

芳水

入るや寒ふく一人も酒乃宵　雲裡

山い和寒を知るよ時雨　雪水

新鶯を蛙乃調子を撞ひ　如昂

古寒乃あ為ひ乃ふ九　星扶

世世ふ寒きふ寒ふ稼る信濃哉　試山

貞和一

雲や花ふ寒ひの月の物古乃を　芳蛍

板沈ひ花れ沈ふ寒も蛙

孔雀に稼ふ三雪かふ寒ふ

門乃ふ寒ふ寒れ沈ふ蛙

庭ふ寒も庵乃庭ふ寒ふ庵

新ふ寒も風の月ふ寒

ことこ

嘆くなしは指もあらじや雪の色
古郷よまた後れ別れの友
新口は時代色乃名とうして
紅代うつるえくも廣いは所世
月乃後さたたまろて色る[illegible]
羽織ひとつ紋の更

高徒

ことこ

雪さ乃紅なき紅くさ乃月夜
はこうるはうるはる乃吉
秋風よまもせは捨ろうまて
夜色なうは心ちや
苦しいん鶴の声ひみを
苦しきを乃我代つきと

書鶴

海をへだてる杜鵑の音
ことさらは嶽山の郭公
主命のまゝつるゝ山ごとをかさね
いそもて咲くしら藤の
帝王の治らるゝ世の月
屋の島数は時雨もまれ

うゐ山ゆき情の門田の月かな
ゆくとしの伊達髭妹
冥界は秋いろ〳〵淋しくて
強弦及古よりおもひうりく
鰹膳のうく猛きたべわく不須宿
月まちて向ふ鏡まこてる

座列　一百五人

一座宗匠二十五人　各發句作者

執筆　東珠　文芝　祇川　文芦
　　　奚此　楊雨　琴調　林鳥

各星花月一章　四季不次

麦さえて梅まだ軒乃月夜哉　素計
本性乃かくれなき山桜　等水
冨士ハ乃ふ福壁も白しまの雪　尤汀
ふかせたに花もかくして柳ふる　何邑
庵乃ゑを星よきたせて夏の代　琴松
苗代や水ぬるたに繁乃新　琴調
世ハ中ふる所ハ安き柳哉　林鳥

ちとせの橋も所なれや　臺邦
名のみあり比丘も住みかれ蜜れ　石瓜
郭の花やすり地もとくもとの　丈是
日和なかれ詠めも声を揚むとり　葉里
手紙乃花のあるなし言乃窓　拾琶
そそしかれ京もとくもとの　亀文
妻乃よ茶屋も出るもの柳乃花　雨竹
鶯手習ひもて雑巾さらさら　文錦

ぬりつぶす乃宮も行くも橋の雨　里枝
一声の蓋の呼さの杉やきた　李巳
乃ゆえ知るやん人の橋ふ　里頃
ぬ清や名りふたむ淵乃花　鑒也
石梅乃花ちり鉢りや西のそれ　泉江
京に吉ハ御ゝて厂乃ワれハ　来里
蓋かゝ数日をくるはく橋うれ　洗聽
にうり沼と接ぬきうり蓋乃花　陽凡

国立国会図書館　タイトル『二季彼岸』　請求記号 863-106
ガラス使用

蓬莱府里かつ夕ひとり　鄭中
さびしさの風れ行くや梅の花　真毫
宵の月多くさびし柳うか　杏雨
花ちめて春也人さ春の清流の奥　李冠
さけ見やわれの宴乃盃こゝろ　汉中
星ちれ名さ人月ちりさくて　杏下
春待ち乳山も行きやさ不柳　知康
学も届うとゝや梅しゝ乃宮　友梁

春たけたまけくちの月ひとし　硬笑
入おち清きこゝろ揚雲花　杜雀
草ゝ春りも如かちく桃乃花　楊雨
知乃花にまれ本さ利と志つ弱　岨栗
学や笛乃うゝに志しの春　青山
うゝもすれ風とに乃ゝ精うか　呂邦
西雲の恵ち人ゝ知ゝ春ゝ　梅左
石日和乃ちれて海ゝ小蔵ゝ　竹路

雑をもつてうたにまなばせし　松茂

人もまねびてうたひやすしと　少年　拾裡

梅もさそひかもうぐひすの　少年　知昂

毛穂は雪ふりかくしたれば　少年　東珠

梅の花にほひ高き宮の内　少年　玉似

梅や一枝折てかざしの花　少年　菊史

梅の香や竜田の山の花　少年　幸七

水仙やちいさうてむさうけ　少年　梅史

弱竹に梅をかくしておくれ　少年　梅午

ちらくとそをかさしやせてゆくか　栄苻

盧生庵の前にうゑし梅　惜雪

たんてをあこれば梅のあるひる　子賀

古井戸角を角つぬ人も掬ば　芳角

星よりもして月におそるべしたれ　少年　文水

ゆくてをつぬ水を掬のかゆるか　南里

旅人の笠をぬぎてやすらふか　女　文繁

嵯峨にむかふ乃風流や蛙さそふ　水巴
西乃沢ぬをはなれて柳一うの車　橙司
鵜のけむりはるゝ入色　祇川
夏北日にちを迎してや岩乃花　鳥孝
けむりを引そめてや春ちらす　鳶明
声たゝり月後よ猶る雲やなを　東鴉
赦立にちる花深くもるゝれ　蛙夕
海をハさを通る所をり山ちらす　文芦

宮を降るあすゝ雨ちゝ橋の秋　如啓
蛙んもかくゝ桜ちり山や美人姿　女白旨
名ちけさも蕨ゝ和ゝ蛙ちゝ　五筍
神の勇や冨ゝ山ちゝ梅乃岩　雉山
星くゝさゝ乃神や山を久宮　白萩
冨ゝ山ちゝ匂ひや春よ光そ　試山
山ちゝ神てよ春ゝかんこゝ　玉星
ちゝ出て蛙ゝ彼岸さゝ　色谷

無上の山の寺の鐘の響の聞ゆる　魚斎
[illegible]や駅の垣根おとろへ　松雨
[illegible]なる水下に[illegible]なる縁　白藤
[illegible]一人[illegible]高く[illegible]　乙童
[illegible]の駅の[illegible]縄を[illegible]　英枝
[illegible]所門[illegible]山さくら　白李
暁の[illegible]や[illegible]山[illegible]　里窓
芦の屋の[illegible]の[illegible]　左静

[illegible]庵の[illegible]や[illegible]の[illegible]の声　松翁
一[illegible]は[illegible]れ[illegible]山の[illegible]の花　塾刀　里鶏
[illegible]の[illegible]に[illegible]る柳　丈羽
布[illegible]の[illegible]や[illegible]れ[illegible]　全之
[illegible]の[illegible]も[illegible]れ[illegible]墨　岩谷堂　呉袖
[illegible]や[illegible]を[illegible]おこし　里箇
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　本木連　壺中

花時を吹絡よかもむ廣野ゝ分　本木連　香竹
留乃夜代道をてゝすゆ梅乃花　里叟
言号かゝ日和よ時ゝ雨や森樹　楚江
言聖より藤出を紙も百人百か　芦笛
感しても〳〵たゝ住く秋れ　朱谷連　龍笠
川言よを行て言し〳〵新公　霍子
河風のめゝ〳〵おなゝやなすさ　神女
名よめて〳〵ゝてもゝ今銀花　喜雄

清をゝ乃むをんゝかゝす柳ゝ　古楠
いゝく乃秋よ五六里ゝ野ゝ　山月連　松陰
中ゝまれ馬ゝ眠りを高れ　稲秀
ちゝ乃ゝ高ゝ色乃ゝ花乃ゝ　指棠
三ケ月に射ゝ行ゝ夕ゝ　箏之
新ゝ乃ゝ世よ笑ゝ新ゝ　兎洲
学乃言よかゝしゝ林ゝ　少年　其杯
蛙風をむゝ尾花可本　桐水

何くれかてをうなかたをかしる　山月連　仙籬

春雨や折くらべる花の梅　中尋

岩崎はそれとも永き霞哉　浦雀

東野一抽ぬきし梅乃花　霞鶯

汐風と人も注ぎくる春風　蒹流

鶯れて茶を乞ふ雨の庭ぞ　芽柳

行記事よりも色香の掛うる　里蘆

降てはくる程やもの初菜　梅雅

雑子乃声ふ海ふ近しかき　松峩

佐保姫乃うこ乃ぬくやひさく　東邑

なつ小さを中ゆ色て降乃巣立　涼志

一夏や夏よ乃影かゆきまた　素蝶

楊花ふ雪ふ春りり藪乃梅　閑柳

山吹よ誰よ乃ぬ乃れ春　紅柵

西風乃あれを見まや菜乃ノ　釣舟

おりりを呼て見ふかんこ乃　仙露

宮崎連

音化てあるや枕の橋乃月　可的

うらしまや月日も梅よ家も宴　可舟

一声の雲乃口切ほとゝぎす　可白

山を焼く口和とをくゝ春雨　可晴

ふと〳〵ぬるゝれ咲やいとさくら　可南

花ゆりもこゝ日にめしの茶山　可因

蛇も来くゝ雪りやいか数海の絮　柳滴

芳日乃猶やゝもあり山梅　石巻　為本

三尼来乃夏ぢゝ老人交

ふれを守りて各一句を拾く

叢祠迫夜　芳水

千令のうに佛乃見まもる

叢頭日　文理

遠猶てまつるや此日こゝ墓

追悼　麦山

長乃日の孫とゝの之の邪

中日　白英

かつてていたの中の名かけ

追悼　文雯

七夕乃宵月の味うれ

陸奥　雲祝

梅ふもちひしくとり梅ゝ

昊前飾真菰　初日　星鶏

満奈　阿川

食堂席

初日　砂物　阿川

後日　立花丈羽

国立国会図書館　タイトル『二季彼岸』　請求記号 863-106
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二季彼岸』　請求記号 863-106
ガラス使用

きたりて梅華仏堂
を造りて、塚の西に
設けし二山の古墳を寄の翠
玩ぶこと一年餘の程卓う
寄り百字の門弟、号を古城和尚と
二十五年乃文墨とかたふ家うそ美
いますらめく法乃ふかりしに
師乃毋徒の寄特うもなへうんら

墨の保乃ちに於て校真しーうく唐宋の
自を鑑みて惜鑑を抱き和漢乃
一世うに恍乃も抱けうて先法
此教師よ言をもうせハ者いさ
也多此折分あるを門下に上ア
乃負を擢く彼杜甫の保平の八絵
を見者よ三十六の法絵を抱て絵の
高弟東乃尊よ絵画法の抱を

国立国会図書館　タイトル『二季彼岸』 請求記号 863-106

ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ツヽシ　はぎの花こぼれ咲ける　左汐
ホシロ　わび破ふ時宜もまとゐや汐の　文芽
スモヽ　ほのぼのとんぐりもやとられ汐　林多
ホアカ　あるゝさくの赤ちともや手毬さけ　李且
アサミ　春雨や佐野の渡りとゝれ汐　楊西
キカン　ゝゝねふ赤とおもふ鼻や梅のも　泉江
ホタン　ちりぬまた咲ふ沢ゝとむらの汐　青蚌
クイナ　宮ゝかゝて作ふんゑのゝ　里項

レンケ　歴くも梅と破ふりゝの方解　呂邦
トケン　赤ゆい下ゝも作ふり梅乃汐　左汀
アフヒ　あゝ涼しゝゝゝゝゝゆひの　可耕
ヒスイ　ひねゝゝふ涼ゝゝん市乃宿　杏西
サユリ　雪ゝ柳の花もゝ利休祇　素桂
イスカ　御の宿弧ゝゝも汐や鯨舟　如庵
フヨウ　あゝ山ゝ夏ゝゝゝ作ふ浦のゝ　舒中
ウツラ　ゝ花ゝ月夏と破ふてゝあ　青山

オハナ　[illegible]　芦百
ノシコ　[illegible]　雨弁
シオニ　[illegible]　岨栗
マシコ　[illegible]　琴調
モクケ　[illegible]　琴松
メシロ　[illegible]　[illegible]
ノキク　[illegible]　南里
ツクミ　[illegible]

モミチ　[illegible]　里童
コタカ　[illegible]　桑里
スヽキ　[illegible]　杜麓
コカラ　[illegible]　悟雪
ハナノ　[illegible]　東鯉
ヒタキ　[illegible]　硯笑

[illegible]

月見　[illegible]　栄谷　[illegible]

雪見　墓所の桟敷上座乃ぞ　山ノ月　稲秀

名残乃折白ら
奥もゝれ　れ　永也

暮折サケノ
咲くとゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　雲裡房

沓折サカナ

新造石碑記　雲裡

古義真言宗の奥妙細なる法門乃吟味より
高野光堂の白毫章をとれる金のひかりを
ゆ世りて光を放ちすゝを之ゝ　ゝ　ゝ
かりなる稀なる巳弔世俗よ猛森なる弔
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
と仰き之師乃教誡を　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

延享丙寅十月千葉南りて新木古義の
碑を造り其面に彫刻し分中を擬
せらるゝ所の碑文塚支塚橋塚なり
もとより俗名不義塚なりて吉義先師一乗
乃碑也ちなみに義を捨て義世を
俗治乃不行をいろむと通志乃門人
多年建立不かくれおそし

翁塚　在仙府躑躅園

朝夜塚　在松嶋御嶌

光塚　在平泉中尊寺

櫻塚　在采谷南無菴

863
106

14145

京寺町二条上

井筒屋庄兵衛板

国立国会図書館　タイトル『二季彼岸』　請求記号 863-106

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二季彼岸』 請求記号 863-106

ガラス使用